

「宗教統一」とアジア主義

—大本教と道院・世界紅卍字会の連合運動「世界宗教連合会」の活動実態から—

玉置文弥*

The "Unity of Religions" thought and Pan-Asianism

—From the facts of "World Religious Federation" activity as the cooperation movement of
Oomoto-kyo and Daoyuan-World Red Swastika Society—

TAMAOKI Bunya

キーワード

世界宗教連合会、大本教、道院・世界紅卍字会、「宗教統一」、アジア主義

論文要旨

本論文は、日本の新宗教「大本教」と中国の宗教・慈善団体「道院・世界紅卍字会」の「連合運動」（1923-1935）に着目し、その初期の活動として1925年に北京で両団体を中心に結成された世界宗教連合会を取り上げる。「宗教統一」という理想を掲げた宗教活動でありながら、日本のアジア主義者らによる「満蒙権益」獲得のための政治的手段でもあった世界宗教連合会は、連合運動における宗教／政治の関係性を考察するうえで極めて重要である。にも関わらず大本教・紅卍字会双方の先行研究においては等閑視されており、活動実態の解明やその思想的位置づけが不十分である。したがって本論文では、その結成に至る過程や活動内容などを大本教機関紙誌や政府公文書などの史資料に基づいて解明したうえで、世界宗教連合会の宗教／政治目的の交錯・相克を論じる。以上のことにより、当時の日中間において、「宗教統一」思想とアジア主義がどのように関わりあったかを明らかにすることを目指す。

英文要旨

This paper focuses on the cooperation movement (1923–1935) between the Japanese new religion Ōmotokyō and the Chinese religious and charitable organization Daoyuan-World Red Swastika Society. It highlights the activity of the World Religious Federation, which was formed in Beijing in 1925, as the initial stage of the cooperation movement. Although the World Religious Federation was a religious movement with a unity of religions, it was additionally a political means for the Japanese Pan-Asianists to acquire Manchurian–Mongolian rights. Hence, it is crucial to examine the relationship between religion and politics in the cooperation movement. However, this activity has been neglected in previous studies of both groups, thus the available facts and ideological position have proved insufficient. Therefore, this paper elucidates the process of its formation and its activities based on historical materials, such as the official journal of Ōmotokyō and government documents, and discusses the connections and conflicts between the religious and political arms of the World Religious Federation. The paper clarifies how the thought of religious unity and Pan-Asianism were related in Japan and China during that era.

*東京工業大学大学院環境・社会理工学院博士後期課程／日本学術振興会特別研究員

1. はじめに

1923年9月1日に発生した関東大震災の被害は甚大かつ悲惨であったが、その一方で、悪化の一途をたどっていた日中関係を緩和させる契機ともなった。というのも、1915年に日本政府が「対華21カ条要求」を中国政府に突き付けて以降、中国では抗日感情・ナショナリズムが高まり続けており、その条約の内容や批准をめぐる激しい応酬が繰り返されてきたが、そんな中での大災害に、中国はそういった問題を一旦脇に置いて、官民一体となり総力を挙げた救援を開始したのである⁽¹⁾。

本論文で取り上げる中国の宗教団体道院・世界紅卍字会も救援を行ったが、同団体では扶乩（自動書記）による「訓示」によって、関東大震災に対する次のような「見解」が示された。

一望の焼け野原を見、なんぞ痛ましきに耐えんや。然るに災劫を造成する原因は、実にかの東京における都会士の心理、悪気によってこれを造成せるのみ。未だ落ち亡びざるを見て、これを救う。

（中略）今その人心を觀るに、依然として未だ些かも前非を悔いて改むる所なし [台湾道院編 2014: 3-4]。

すなわち、関東大震災の被災状況は本当に痛ましいものであるが、その原因は「東京における都会士の心理、悪気」である。にも関わらず彼らは未だその「前非」を悔いて改めようとはしていない。この訓示には、震災の原因を日本人の心理に求めている点に加え、それを紅卍字会が「善心」・「道」によって救うとしているところに紅卍字会の世界観が表されている。宗教学者の宮田義矢によれば、道院の教義書『太乙北極真經』では、「劫」すなわち災害は「我見に執着する人々—宗教や諸子百家、註釈の学派—の争いによって生じる、つまり人が作り出すものとみなす」[宮田 2015: 51]。そのため紅卍字会は、内面的実践（坐功）と外面的実践（慈善）を相互に行うことで災害を無くし「救世」を行っていきとしているのである。紅卍字会は、こういった思想に基づき、関東大震災に対して救援を行った。その際、日本の新宗教団体大本教と提携して、ともに後述の「宗教統一」思想とアジア主義を基調とする「連合運動」（1923-1935年）を開始した。

筆者はすでに、大本教との連合運動の初期段階（1923-1925年）の過程を多くの一次史料をもとに論じてきた [玉置 2021a・2021b]。以下に、それをもとにして大本教と紅卍字会は当時どのような状況にあったのかを、世界宗教連合会に至る経過と共に一瞥しておこう。

1923年の関東大震災をきっかけに提携した両団体は、まず1924年3月に紅卍字会初の海外支部神戸道院を設立した。これは大本教が主体となって運営された。それとほぼ同時期に大本教の出口王仁三郎は、紅卍字会の協力を得ながら「満蒙」（以下、括弧無し）への布教・行軍を行った（入蒙）。黒龍会系の大陸浪人や奉天特務、張作霖配下の將軍盧占魁、馬賊など王仁三郎に関わった各勢力の思惑が交錯する

中で行われた入蒙は結局、張作霖に捕縛されて終わり、王仁三郎は中国からの退去を命ぜられたが、日本国内ではその破天荒な行動に喝采が浴びせられた。第一次大本事件（1921年）によって「邪教」の烙印を押された王仁三郎にとって、教勢の維持・拡大は重大な関心事であり、その意味でこの騒動は効果的であった。

この後1925年1月に動き出す計画が、本論文で取り上げる世界宗教連合会である。この活動の内容などについては拙稿でも触れており、その意義・目的として、①宗教：「救世」を軸に各宗教を接近させること、②政治：日本側・大本教の出口王仁三郎や黒龍会などの右翼・アジア主義者による満蒙開発・大陸侵略の手段、以上二点を挙げた〔玉置2021a：87〕。

本論文は、その拙稿を下敷きとしながらも（世界宗教連合会の趣旨、活動事例、結成過程について）、その後の研究によりさらに分析を進める必要があると考えられた諸課題を踏まえて論じられる。拙稿から発展した点は次の通りである。第一に使用される史資料の分量・範囲が挙げられる。以前に比して世界宗教連合会に関する史資料の調査が進んだことで、その結成に至る経過、参加者、活動の事例などその活動実態が網羅的に論じられる。第二に政治／宗教、日本／中国、侵略／連帯といった大本教と紅卍字会の連合運動の思想的な相克・葛藤が詳述される。第三にアジア主義との関係性について。内田良平などアジア主義者らの狙いをさらに追及したことで、「宗教統一」（以下、括弧無し）とアジア主義の関係性が浮かび上がる。

さて、ではこの活動はこれまで先行研究においてどのように論じられてきたのだろうか。

第一に大本教の「万教同根」思想の実践という評価である。例えば、Richard Fox Youngは、「万教同根」の起源と発展を論じる中で、複数の宗教が一つの統一体に統合されるプロセスとしてそれを捉え、世界宗教連合会もその過程におけるものとして論じている〔Young 1988〕。Nancy K Stalkerは「心を同じくする宗教組織との交流を通じて、万教同根という大本教の信念を実現する」ものとしている〔Stalker 2009：229〕。これらは川村邦光が述べるように、「世界の諸宗教との提携を推進」〔川村2017：261〕するものであったという前提に立っている。武藤亮飛は、「まだ言葉としては表現されてはいなかったが、『万教同根』がその基本思想であり、「宗教の本質的な何かに立ち帰るということが目指されて」といたと評価する〔武藤2016：35〕。さらにJoel Amisはもう一步踏み込んで次のように述べる。世界宗教連合会は、大本教において1920年代に確立された「万教同根」の教義に基づいた「（王仁三郎の一引用者）最初の異宗教間活動への主要な進出」であり、「異宗教間の統一に向けた組織的アプローチのアイデアを導入」したものである〔Amis 2015：94〕。いずれにしても、世界宗教連合会は大本教史における「万教同根」思想に基づく宗教間協力、あるいは宗教統一に向けた活動としての側面が強調される傾向にある。本論文は宗教統一を以上のような意味において用い、かつ世界宗教連合会にそ

の要素が間違いなくあったとも認めるものである。しかしながらどのような団体と、どのように「協力」したのか、すなわち活動実態が明らかでない以上、そのような評価が妥当なのか不明である。また、後に見ていくように、純粋な「宗教」活動と言えるのかについても疑問が残る。

第二に道院・世界紅卍字会「五教合一」論の実践としてである。宮田義矢は紅卍字会の世界宗教連合会への参加は「合一の主張を実践に移した」ものとしている [宮田 2015 : 105]。しかし管見の限り、日中の紅卍字会研究において、世界宗教連合会の名が出ることは宮田の研究を除いてほとんどなく、紅卍字会発行の紙誌にも記載が無いことは指摘しておかねばならない。

以上は、両団体の宗教統一思想に着目するものであるが、第三は大本教の中国・満蒙への侵出としての評価である。孫江は、「宗教をもって中日連合を促す計画」とし、「1920年代の中国で「反日」ナショナリズムが高まる中、世界宗教連合会の設立は、客観的に、ナショナリズムの対立を解消するという役割があった」 [孫 2004 : 47-53] という、冒頭で述べたような当時の日中関係に着目した議論を行っている。また、邵雍は世界宗教連合会に加盟した中国の諸団体は「親日宗教団体」であるとした上で、「世界宗教連合会の実施は、日本の大本教が宗教をもって世界征服をするという計画の、重要な側面である」 [邵 2005 : 124-129] と、日本・大本教の侵略として捉えている。また密素敏も「大本教が宗教的に中国を征服するための道具」 [密 : 2007 : 33] であるとしているが、これらの多くは、大本教の「世界統一」思想として、

大本の呼号する世界宗教統一は、(中略) めいめい意志想念が異つてゐるに相応して、各宗教も異つてゐるのであるから、大きな目を見た場合は名称は神であらうが、仏であらうが、基督であらうが何でもよい。総ての宗教団体なり思想界が大本の意志通りになったら、それが大本の世界統一が実現したのである [大本 70 年史編纂会編 1964 : 768]

という王仁三郎の言を引用し、それを根拠に論じている。すなわち大本教は各宗教を自らに同一化させるという意味での「世界統一」を目指しており、その具体策が世界宗教連合会であり、それは宗教による「世界征服」を目指すものであったとする。そしてその根拠には日本の右翼・アジア主義者が世界宗教連合会に加入していたという事実がある。行論のうちに明らかになるように、世界宗教連合会には日本・大本教の中国侵略としての側面があったことは間違いない。しかし日中両国の宗教団体・政治家が参加していたことは、その内部で日中関係に対する相克があったと推測され、単純な侵略／被侵略の構図で該活動を捉えることは出来ないのではないか。さらに言えば、加盟団体が複数あった事実を鑑みれば、大本教のみを連合会の主体として論じるのには無理があるだろう。

ところで、大本教研究全体にも目を転ずると、大本教・王仁三郎の活動・思想と、以上に述べたような宗教統一・アジア主義や、侵略・連帯などとの関連については、確かに重要な論点として注目されて

きた。しかしながら、それぞれが対極的な主張・言説として対比されて論じられるために、それらの矛盾や「ぶれ」が指摘され、王仁三郎の思想の複雑性が述べられるに留まってきた。本論文で見ていくように、世界宗教連合会はその「ぶれ」を内面化していた、いわば過渡期の活動である。その意味で大本教の宗教・政治思想におけるせめぎあいを包含しており、その後の昭和戦前期における大本教の超国家主義的活動の前段階、すなわちそれを規定するものとして、無視することは出来ない。

以上に見た先行研究の状況と課題、そして拙稿を踏まえ、本論文では、第一次（1921年）～第二次（1935年）大本事件の間に位置する連合運動の具体的活動として、世界宗教連合会（以下、原則として連合会と呼称する）を取り上げる。この活動は、既述の通り大本教・紅卍字会双方の研究において等閑視されてきたために、活動実態やその宗教・政治思想の位置づけがまだまだ不十分である。特に大本教研究においてはその理由から、昭和戦前期の活動の前段階における、過渡期の大本教の姿が見えてこなかった。したがって本論文では、言説レベルに留まらず、一次史料に基づいて活動実態の解明を行うことで、その課題に挑戦し、その上で連合運動に本活動を位置づけたい。以上のことにより、①両団体の研究の空白を埋め、②20世紀初頭の日中間における宗教交流がどのように政治に関わったか、具体的には宗教統一思想とアジア主義の交錯を明らかにすることを目指す。

2. 「亜細亜宗教連盟」構想—宗教的理想と大陸膨張主義

2-1 発端

王仁三郎自身の名声を高め、教団の復興という点で有効であった入蒙だが、その目的たる「蒙古王国」建国は達せられるべくも無かった。おそらく王仁三郎は、自らのカリスマ性のみでは宗教・政治の両目的を達成することは困難であると考え、ある程度活動方針を転換した。すなわち諸宗教の統一である。

1925年2月23日、神戸道院において開院一周年記念式典が催された。その式上、神戸道院幹部で大本教神戸支部の中尾晃久から、王仁三郎の理想に沿った「宗教連盟」設立が提案された。これはのちに「万国信教愛善会」として成立する⁽²⁾。王仁三郎は同様に、中国でもそのような団体を設立しようと考えた。『大本70年史』によれば発端は次のようなものである。

1925（大正14）年の1月26日には、中国の李松年が亜細亜宗教連盟設立のために、綾部を訪れてきた。そこで王仁三郎は、李松年を先導とし、同年陰暦4月12日松村真澄に、連合会についての全権を委ねて、その成立を促すために、松村を北京に派遣することにした。北京においては熱心な仏教家として知られていた洪徳滋が、李松年から伝えられた使命によって、世界宗教連合会成立のための準

備を整えていた [大本 70 年史編纂会編 1964 : 766]

中国山西省の靈山五台山のイスラーム信徒で、当時政府財政部公債府司長でもあった洪鑄（徳滋）⁽³⁾の代理として訪日した李松年⁽⁴⁾（のちに紅卍字会・大本教信者となる）は、「亜細亜宗教連盟」設立の意を伝えるため王仁三郎に面会しに来た。李の提案に王仁三郎は同意し具体策を提案した。当時の王仁三郎は、既述の通り入蒙後であったが、紅卍字会について次のように述べていた（傍線引用者、以下同じ）。

日支親善ニ就テハ宗教ニ依ルヲ最良ト考フルカ故ニ豫テ支那紅卍字会ト諒解提携スル事トシ同会統掌ノ資格ヲ以テ蒙古ニ入りタルカ各方面ニ於テ大イニ歓迎ヲ受ケ大官連トモ懇親ヲ重ネ親善ニ努メタリ
又呉佩孚ノ如キ自分ノ再渡滿スル事ヲ強要シ來ラレリ然レバ岡崎鉄首、矢野大佐、頭山満、内田良平
及実業視察ノ爲メ來朝セル北京政府財政顧問陸軍中將李松年等ト協議シ渡滿ニ関シ劃策中ナリ⁽⁵⁾

紅卍字会との提携は入蒙において有用で、それにより「大官連」とも会うことが出来たと述べるだけでなく、中華民国北京政府（＝北洋政府）期の直隸派の有力軍人呉佩孚が再び「渡滿」するように「強要」してきているとも述べている。そのため、岡崎鉄首、矢野祐太郎、内田良平、頭山満、李松年らと「渡滿」について協議しているのだという。このメンバーは今後もしばしば登場するが、彼らは基本的には日本の大陸への拡張、満蒙「独立」を狙っていた。王仁三郎はある程度彼らを利用しながらも、利用されてもいた。いずれにしてもこのような動きと「亜細亜宗教連盟」構想は連動していたのである。

さて、李松年が帰国した後の同年 2 月、在中国の大本教信徒岡崎鉄首が、今度は李のメッセンジャーとして王仁三郎のもとを訪れ、李、洪鑄らが王仁三郎の意図に賛成であると伝えた。王仁三郎は早速、側近の松村真澄、北村隆光、岡崎鉄首、さらに連合会に加わる事となる頭山満、内田良平の代理岡貞吉らを北京に派遣し⁽⁶⁾、その準備に取り掛からせた。

2-2 大本教と「廢帝」溥儀

1925 年 2 月 24 日の、京都府知事池田宏が内務大臣若槻礼次郎らに送った大本教の動向に関する報告書に、次のような一文がある。

神戸道院ヨリ本月一九日印度人（中略）ハ瑞祥閣ニ王仁三郎ヲ訪問セル趣ナルカ要件ハ日本及支那、
印度并ニ土耳其等ノ東亞ニ於ケル宗教ヲ統一シ支那宣統廢帝ヲ総裁ニ王仁三郎ヲ副総裁又ハ顧問ニ推
シ亜細亜宗教聯盟ナルモノヲ設立スルコトヲ凝議シタル⁽⁷⁾

ここで重要なことは「宣統廢帝」を、「亜細亜宗教連盟」の総裁として推戴しようとする王仁三郎らが考えていることである。清朝最後の皇帝であり、後の「満洲国」皇帝の愛新覺羅溥儀の総裁案はどのようにして構想されたのであろうか。

時は1925年3月である。京都府知事の池田宏は、王仁三郎の言動として次のような報告書を書いている。

曩ニ支那財政顧問陸軍中將李松年カ自分ヲ訪問セシハ山西省五台山ニ在ル活佛ノ使者トシテ来レル者ニシテ要スルニ彼レト大本教ト聯盟セムカ為メナルカ自分ハ其總裁ニ囑望サレタルモ實ハ極秘ナルモ近ク支那宣統帝カ我國ヲ来訪セル事ニ内定シ居レルモ國際關係其他種々ノ事情アリテ面倒ナレバ結局帝ヲ宗教家トシテ迎フルニ至レバ其等ノ問題モ一蹴シ去ル事ヲ得ムトノ事由ニテ宗教家トシテノ渡来説有力トナレリ恐ラク事実トシテ現ハルゝ事ト信ス若シ渡来説實現セバ廢帝ヲ宗教聯盟ノ總裁ニ自分ハ帝ノ輔佐役タラム考ヘナリ故ニ其ノ意味ニ於テ李松年ノ依頼ヲ受諾セサリシ次第ナル⁽⁸⁾

王仁三郎は、後述する五台山の「活佛」＝章嘉活仏および洪鈞の使者として1月に綾部を訪れた李松年から、「亜細亜宗教連盟」總裁に就任するよう求められたが、その役には溥儀を就け、自らはその輔佐になるつもりであったためにそれを断った。おそらく溥儀を總裁とする案は、この時初めて李松年に伝えられた。そしてその構想は、まず溥儀を「宗教家」として訪日させることに始まるという。その実現のため、大本教幹部は外務省亜細亜局長などに請願をしたりしている⁽⁹⁾。ここで当時の溥儀の状況を少しだけ述べておくと、彼は紫禁城を馮玉祥によって追放されたのち日本公使館亡命を経て、日本の天津租界に移ったばかりであった。しかし日本側は、元清朝皇帝溥儀を受け入れることは中国への内政干渉となるのではないかなどの問題から、その扱いに苦慮していた。その一挙手一投足は中国内外を問わず注目されていたのである。そんな中で溥儀訪日の案が俎上に上がった。

1925年3月2日の『東京新聞』は、「宣統廢帝こつそり日本へ28日營口丸で事實らしい節が多い」と報道している。さらに、上海総領事館や関東庁、「支那」駐屯軍などの間で、溥儀訪日に関する議論がなされてもおり⁽¹⁰⁾、訪日の可能性はあったと言える。

そのためか、3月にすでに帰国していた李松年から王仁三郎への書簡には、「宣統帝来月日本ヲ訪問サルゝ趣ナレハ其節ハ御案内致シ宗教聯盟ノ事モ相談致度小生ハ東京ニ在テ帝ノ到着電報ヲ待ケ門司又ハ神戸へ迎フヘク⁽¹¹⁾」とあり、その訪日が内定しているかのような内容が見える。そして「亜細亜宗教連盟」總裁就任をそこで溥儀に持ち掛けようとしている。すなわち、王仁三郎と李は溥儀の天津における状況や、この訪日の情報を早い段階で外務省などから入手していたために、そのタイミングに合わせて總裁就任を願い出ようと構想したのであろう。

しかし、溥儀は来日しなかった。溥儀は回顧録で、訪日を側近の羅振玉から勧められたが「日本へいっても、日本が歓迎するとは限らない」[愛新覺羅溥儀 1977 (1964) : 207] と考え、さらに日本側も溥儀を清朝復辟運動に利用しているという印象を中国や欧米諸国に与える可能性があるため訪日は利が無いと判断、取りやめとなった。溥儀總裁就任構想は立ち消えとなったのである。

その後の大本教と溥儀の関係を少しだけ見ておくと、翌 1926 年、王仁三郎は大本教幹部で元実業之日本社理事栗原白嶺を天津に派遣し、10 月 21 日に溥儀の邸宅を訪ねさせた。これが大本教と溥儀が直接接触した初の機会であった [栗原 1929 : 67]。また栗原はこの天津行きで段祺瑞や黎元洪とも面会した。特に後述の悟善社の信者である段との会談では、「大本教の世界宗教統一と執政の五教統一は期せずして一致し堅き握手を交わした⁽¹²⁾」。

2-3 五台山の活仏との提携—宗教家として

溥儀総裁案が継続していた 1925 年 3 月 10 日、先述の洪鑄から李松年へ送られた書簡には、大略次のような内容が記されていた。

出口総裁ニハ五台山へ御越シノ趣活佛ハ出口先生ノ御光来ノ節ハ北京佛教会ニ紹介シ歡待致ス様申居候今活佛ノ名刺一葉御送り候間出口先生へ御渡被下度出口先生ニシテ活佛ト提携セラル事トナレバ支那本國蒙古西藏ノ佛教全体ヲ一團トナシ⁽¹³⁾

ここで洪は、王仁三郎との提携により中国・モンゴル・チベットの「佛教」を「一團」とするという、先に名前の出た章嘉活仏 7 世の希望を明らかにしている。大本教とチベット仏教の関係については別稿を期したいが、その章嘉活仏とは、旧清朝が北京周辺寺院や在モンゴルのチベット仏教僧に授与していた称号「ジャサクラマ」を有し、「満洲」を含む中国、蒙古、チベットにおける同教僧侶の首領として、当地では宗教・政治的な影響力を持っていた人物である。おそらく彼と洪鑄とは五台山で関係を結んでいたであろう、洪はその意をさらに李松年に伝え、王仁三郎へのメッセンジャーとして日本に送ったのである。

さらに洪の秘書である呉天民（呉佩孚の参謀）から大本教幹部の松村真澄に送られた書簡では、「我東亜ハ欧米ノ潮流ヲ受ケ、互いに争い合っているので、「一衣帯水」の日中が提携し「東亜聯盟」を作る必要がある。したがって王仁三郎に「勇飛」して欲しいと述べられているが⁽¹⁴⁾、章嘉活仏や洪鑄のこういった考えは、「欧米ノ潮流」に抵抗するための日中連帯と宗教統一の希求である。そのことは、彼らが提携を希望した王仁三郎に、少なからず欧米帝国主義に苦しめられているアジアを救うためには連帯せねばならない、という「抵抗としてのアジア主義」[中島 2017 : 39-40] があったことを意味している。

ところで洪と王仁三郎はどのようにして知り合ったのだろうか。様々考えられるが、大本教の松村真澄からの紹介であった可能性が高い。松村は島根県出身の大本教信者で、この頃は同協の大陸進出のために入蒙をはじめ様々な策動をしていた。彼と洪との関係はつぎのようなものである。松村は中国において呉佩孚の軍事顧問岡野増次郎と知り合っていた。その岡野は洪鑄の秘書呉天民と懇意の関係にあっ

たため¹⁵⁾、松村は岡野→呉を通して洪に王仁三郎を紹介したと考えられる。これを受けた洪は、自身の宗教者としての立場を強調しながら、章嘉活仏とともに「亜細亜宗教連盟」創設による日中提携を、王仁三郎を中心にやってもらいたいと考えた。

内戦が頻発する当時の中国において、日本側の様々な勢力は、「日支親善」のかけ声のもと、権益獲得のために中国の有力者とのつながりを築こうと試みていた。大本教はそういった流れの中で、身内にその信者が多かったことから紅卍字会と密接につながり、その活動を積極的に承認していた北洋政府の人脈を中心に関係を構築し、積極的に政治的活動を展開しようとしていたことがこれらの事例から分かるであろう。

2-4 頭山満・内田良平との提携

前節の冒頭で名前が出てきた、頭山満、内田良平と王仁三郎の関係は、「亜細亜宗教連盟」構想が進展していく中において形成され、彼らはこの構想にとって重要な存在となった。

まずは内田から見ていこう。肇国会・黒龍会会員の内田が王仁三郎と直接関係を持ったのは、入蒙後の1925年1月であった。内田は自らの意志で黒龍会の葛生能久らとともに王仁三郎と面会した〔内田良平文書研究会編1994：99〕。時あたかも李松年が「亜細亜宗教連盟」結成を王仁三郎に持ち掛けていた。内田はこれを聞いて賛同し、頭山とともに連合会に名を連ねることとしたのである。元来内田にはロシアの南下に対する警戒心が強くあり、そのために朝鮮の独立運動や中国革命などに様々に関わっていたが、1925年当時は日本の「満蒙権益」（以下、括弧無し）獲得のために支援をしていた孫文と、その問題でのずれが浮き彫りになった後であり（孫文は1924年11月に最後の日本訪問、満蒙権益をめぐる頭山満と対立、いわゆる大アジア主義演説を行い同月帰国、その後癌によって1925年3月死去）、孫文に代わる権益獲得の手段を求めていた。そこに「亜細亜宗教連盟」が現れたのである。内田は大本教を「大日本宗主国を出現せんとする大精神」〔内田良平文書研究会編1994：95〕を有し、「天皇をして世界を知らし召さしめ給ふ」〔内田良平文書研究会編1994：93〕ために活動するものであるとし、その外国布教は世界に「皇道精神を了解」〔内田良平文書研究会編1994：99〕させる黒龍会の目的と一致するとした。したがって、黒龍会が海外に創設した「團體の如きは、挙げて大本の愛善運動に合流」〔内田良平文書研究会編1994：99〕させようとも考え1930年には大本教信徒となった〔駄場2020：149〕。このことから内田は明らかに大本教の天皇・世界統一思想を信奉し、それが彼と大本教をつなぐ基盤となったことが分かるが、根本には満蒙権益獲得の手段としたいという動機があった。

一方の頭山満は王仁三郎とは幾度か面会して懇意であり〔頭山・出口1935：127-137〕。この構想には内田が賛同したのち「支那人間ニ非常ナル信頼ヲ有シ居レル¹⁶⁾」人物として大本教の「松村等ニ於テ

加名方徳⁽¹⁷⁾され、これを承諾する形で加わった。では、二人の「亜細亜宗教連盟」結成に関する動きを見ておこう。次に挙げるのは、1925年4月29日の京都府知事池田宏から内務大臣らへの報告である。

王仁三郎ハ黒龍會長内田良平ヲ介シ秘密裡ニ東京丸ノ内ホテルニ滞在中ノ支那財政顧問李松年ト亜細亜宗教連盟創立ニ関シ協議ヲ進メツトアリタル・・・李松年返国ノ上ハ直ニ北京ニ於テ活佛其他土耳其、波斯、支那各宗教代表等ト宗教聯盟設立ニ関シ協議スル筈ニテ我国ヨリハ遠山満ノ甥ニ該ル岡貞吉カ妻ト共ニ李松年ニ随行渡支セリ⁽¹⁸⁾

1925年4月、内田は、王仁三郎と再来日していた李松年との仲介者となり、東京で彼らと面会し、「亜細亜宗教連盟」について協議をしていた。そして李が4月23日に帰国することとなったため、頭山の甥で玄洋社社員岡喬の息子岡貞吉とその妻を、内田・頭山の代理として随行させることとした。ここには大本教幹部の松村真澄、北村隆光、また岡崎鉄首も加わり、一行は洪鑄のいる北京に向った。

3. 世界宗教連合会の結成

3-1 発会

北京で、派遣された北村と松村は、洪鑄、李松年らの他、連合会に参加する金仲友、王韶聞、黄玉らとともに、「各教の代表者に向つて出口氏の眞意を傳達したところ、皆大いに喜び年來の希望本懐とする所なり」[北村 1926 : 78] と言って、それぞれ参加する意思を示してきたという。北村らは紅卍字会幹部とこの段階で連合会について協議を行っている⁽¹⁹⁾。

「亜細亜宗教連盟」は「世界宗教連合会」という名称に変わり、1925年5月20日、北京の悟善社（救世新教）で举行された発会式によって成立した。発会式では、①臨時主席の推挙、②本会宣言書の宣布、③本会成立までの経過報告、④本会規約の議決、⑤職員選挙、⑥会員の演説、⑦奏楽および記念撮影が行われた。

その理念や目的を示す宣言書の内容は、すでに拙稿において示しているため [玉置 2021 : 80-82]、ここでは簡単にまとめておこう。すなわち、世界は洲・国・種族によって分かれているが、これは本当に小さきことである。近年ではその区分が激しくなり、さらに物質文明が進むにつれ学説が紛糾し、世界は不安定となって争いはますます激化している。この際、国境・種族・階級の別を問わず、「救世」の志を同じくする宗教者は連合会に集合し、互助の精神によって慈善活動を行う。教義は各々異なるから強いて同じにする必要は無く、相互研究の方法とするのみである。このようにすれば一つの団体に各宗教が存在しても何等の不都合は起こらない。そしてやがては世界宗教の統一を目指す。

その目的を論じた個人の見解として、北村の言説を見ておこう。彼は「世界宗教聯合會に就て」と題した文章で次のように述べる。

異教徒が一堂に集まつて虚心坦懐、各自の所屬宗教の教義教規を遵守し而も相互他の信仰を尊重して全人類の福祉を増進し社會の繁榮を目的として世界の平和大同を圖る [北村 1926 : 81]
やはり宗教統一思想のもと、互いが自身のも他の信仰も尊重しながら集合することで、人類平和を招来するというのが基本的路線である。

さらに同教の松村真澄は次のように述べる。

同會ノ趣旨ハ政治的色彩ヲ脱シ宗教ニ依リ世界人類ノ親善ヲ図ルモノニシテ⁽²⁰⁾

「政治的色彩」を脱し、宗教によって、「世界人類ノ親善」、「國民思想ノ動搖」の挽回を目指すのが本会の趣旨であるとする。

次に、連合会の規約（「章程」）についても簡単に触れておこう。発会式においては、悟善社代表江朝宗が座長、道教代表の陳明霖が議長となって会議が開かれた⁽²¹⁾。そこには三月に李松年らと中国へ渡った大本教の北村や、後述する各宗教の発起人 30 人ほどが参加した。席上、大本教の北村は「稍もすると形式と文字に囚はれんとする章程に對し大本の主義精神を注入することに努めた」 [北村 1926 : 79] という。

「章程」の内容は、①各宗教を相互に研究して各民族を「善」に向かわせることを目的とすること、②「統事処」を中国に置くこと（暫定的には、総本部：北京悟善社、東洋本部：亀岡の大本教に置かれた。さらに将来的には世界各国への分会設立を目指すとした）、③入会する各宗教の信者はそれぞれの教義を遵守すること、④評議會制をとること、⑤4 課（総務課、文書課、交際課、慈善課）を設けることが定められた⁽²²⁾。他に、選挙によって評議會を構成することなどが定められてもおり、連合会は参加した各宗教が「民主的な」手続きによって運営することを目指したのである。活動内容については特に記されておらず、この段階では具体的なそれはまだ白紙であったと考えられる。

趣旨と「章程」から、この時点では、例えば大本教の教義への同一化や、すべての宗教の「根」は大本教（あるいは「皇道」）である、といったような主張はなされていない。すなわち、連合会は諸宗教が相互に研究して意見を交換し、接近することを目指す「宗派組織化」 [Amis 2015 : 95] の動きとして評価出来よう。

3-2 加盟団体と参加者

中国の歴史学者邵雍は、連合会に加盟した団体を「親日宗教団体」 [邵雍 2005 : 1] とだけ述べているが、その参加者たちはどういった人物なのだろうか。以下に、拙稿に加え、新たに参加が明らかとな

った人物を示しておこう⁽²³⁾。

【**紅卍字会**】徐世光（第4代中華民国大總統徐世昌の兄、山東省などで知府などを歴任。紅十字会会長でもあった）・曾松筠・王芝祥・高信鵬・喬禮会・馮閱模（会計検査院局長）

【**悟善社**】江朝宗・胡宗虞・朱煥文

【**道教（全真教）**】陳明霖（道教の二大教派全真教の本山白雲觀道主で紅卍字会信者）

【**仏教**】諦閑（「中国四大仏教名山」普陀山にある普照寺の住職）・陳迂傑（仏教会）・吳獅

【**儒教**】葉金麟

【**「ラマ教」（チベット仏教）**】章嘉活仏・黄玉・洪铸（財政部国債局長）

【**イスラーム**】王振益（中国イスラーム社会のリーダー的存在で北京清真寺所属）・馬静生

【**キリスト教**】譚福（民国大学、北京大学教授）、アール・オー・ペバンス（アメリカ人）

【**肩書が職名のみのも者・その他**】王韶聞（内務部衛生局長）・李松年（政府財政顧問）・張修爵（軍医学校校長）・田歩愴（山東省政務処長）・田振藻・王錫賓（陸軍中將）・金仲友（財政部国債局課長）・吳昺（実業家）・王兆鰲・大勇・畢善功（イギリス人）

※参加者のうち、経歴が詳しく分かる者については拙稿 [2021a] (註16)～(24)) に記載したのでそちらを参照されたい。

中国における、という限定が付くものの、一応は儒教・道教・仏教・イスラーム・キリスト教の「五教」が参加した⁽²⁴⁾。このうち、紅卍字会と「姉妹関係」にあった悟善社は当時の中国における「五教合一」・「教派統合」を目指した「世界宗教大同会」や「万国道德会」とともに、その代表的存在であった [宮田 2015: 97]。すなわち、連合会はその系譜の中に結成された宗教団体であったと言える。このことは東アジア地域において国家を越えて幅広い宗派の集合・接近を図った画期的事例であり、かつ大本教の独自性の現れと言ってよいだろう。大本教より以前から海外布教を行っていた仏教各派など日本宗教の多くは、偏狭に自らの教義を捧持し、当地における「開教」を目指して活動したため、現地の人々が到底受け入れられない主張や活動も多かった。また、そこで宗教統一的言説が論じられたとしても、連合会のように諸宗教団体を集合させるという実践が行われることはなかった。それに対して大本教は、紅卍字会との提携によって教義を展開させ、連合会にあっては自らの教義のみに固執せず、他宗教にもそれへの信仰は強要しなかった (p.8 左の宣言書の摘要を参照)。

その一方で、彼らの多くが宗教者であると同時に、政治的存在（主に北洋政府の政治家・高級軍人・官僚・紳商など）でもあったことは、連合会の政治的性格を強める大きな要因でもあった。そのことは次章で触れるが、日中関係に大きく影響していくこととなる。

日本人参加者についても拙稿で述べた通りである。すなわち、大陸侵略に積極的であった人物が多い

のであるが、本論文ではその他にも有力政治家などの参加があったことを示すことで、連合会がいかに日本の大陸政策と密接に結びついていたかを述べておきたい。政治家としては、箕浦勝人（第二次大隈内閣逋信大臣）、秋山定輔（元衆議院議員、孫文を支援）、田中義一（陸相、立憲政友会総裁）、武富時敏（第二次大隈内閣逋信大臣・大蔵大臣）、小川平吉（加藤高明内閣司法大臣）が、軍人では陸軍の上原勇作、山梨半造、三浦梧楼（その三男松二郎も）、海軍の山本権兵衛ら、元帥、大将クラスの者が加わった⁽²⁵⁾。このうち特に小川平吉は、明治期から日露主戦論を唱えていた対外強硬主義者であり、第一次世界大戦前には中国における日本の権益獲得を声高に主張し、「対華 21 ヶ条要求」の原案ともなる意見書「対支外交東洋平和根本策」を作成するなど〔奈良岡 2015：123-125〕、中国への侵略を推し進めようとする急先鋒であった。他の者も基本路線としては大陸膨張主義者である。

以上の日本人参加者の多くは、大陸侵出を強く主張した人物であり、その動機は宗教的理想からというよりは、大陸侵出の懐柔策として宗教、特に一般民衆に浸透している紅卍字会などの団体を利用しようと考えて加盟したと考えられる。特に連合会には、中国側の有力政治家や、多くの宗教団体が参加していたことは日本人加盟者にとって魅力的に映じたに違いなく、宗教統一という理想を掲げる連合会を介して中国政府の要人とつながることで、侵略的意図を露骨に示さずに権益獲得という政略達成を目指した。

冒頭で論じたように、中国の先行研究では、連合会を「大本教の宗教的中国征服」ととらえるものが多いが、そもそも連合会を一つの主体で語ることは、ここまで見てきたことからわかるようにきわめて困難である。章を改めてさらにその複雑性に切り込んでみたい。

4. 政略か理想か—侵略／被侵略のはざままで

前章で見てきた日本人参加者の狙いをはじめ、連合会には、明らかに日本の満蒙権益獲得のための手段という性格があった。その具体的計画としては、章嘉活仏への接近や、「蒙古開拓」と称した「張多鉄道」敷設計画などがある⁽²⁶⁾。さらに、山西省の鉞山採掘権獲得計画というものもあり、松村を中心に山西省督軍の閻錫山らにはたらきかけ、鉞山資源を手に入れようとした⁽²⁷⁾。これらの計画が実際に達成されたかは定かでないが、連合会また紅卍字会には中国政府関係者も多くいたために、こういった計画・活動が、ある程度現実味を帯びたものとして展開していったと考えられる。連合会は宗教を以って、満蒙・中国の政治的有力者らと繋がっていき、当地における「権益」獲得に努めたわけだが、これは明らかに日本の大陸侵略としての側面である。

だが、連合会の政治的側面はそれ一辺倒ではなかった。1925年7月の京都府知事池田宏の報告に次

のような記述がある。

世界宗教聯合會ニ於テ支那會員トノ間ニ將來若シ日支外交ノ破綻ヲ見ルカ如キ事アル場合ハ會員相互
聯絡ヲ執リ渦中ニ投セス又日支條約中支那ニ不利益ノ点ハ極力破棄スル事ニ聲援シ所謂人類愛善ノ本
義ニ尽處アルヘシトノ會員間ニ密約アリ⁽²⁸⁾

日中外交が「破綻」に至った場合、連合会員はその「渦中に投ぜず」、またその政府間に交わされた
「条約」に、中国側の不利益な点があればそれを破棄する方向に「聲援」する。すなわち条約に反対す
ることも辞さない態度を鮮明にした。ではその「条約」とは何を指しているのか。それは、「対華 21 カ
条要求」であった。

日支間ニ締結サレアル二一ヶ條ノ條約ハ兩國間ノ親善ヲ阻害スルヲ以テ之ニ對シ世界宗教聯合會ハ抗
議ヲ為ス事ニ決定シタル趣ナルカ尚教科書中ニ此ノ一節記載アルヲ以テ主務省ニ對シ該文ノ削除方ヲ
陳情スル意嚮アルモノノ如シ尚同會ハ日支國交上急變化ヲ来スカ如キ事アリトスルモ會員ハ堅ク結束
ヲ保チ目的ノ貫徹ニ努力スル事ヲモ誓約セシ趣ナリ⁽²⁹⁾

周知のごとく、1915年1月に大隈重信内閣が中国政府に対して突きつけた「対華 21 カ条要求」は、そ
の内容の広範さとむき出しの侵略性によって、中国人を強く刺激し、猛烈な反対運動を引き起こすこと
となったが、締結からしばらく後の1923年には駐日公使がその廃棄を日本政府に通告するまでに至っ
ている。この日本の侵略的条約に連合会は反対の意を示したのであるが、そこには両国の相克が垣間見
える。

これまで見てきたとおり、連合会は満蒙權益確保のために様々な方策を講じている。それは明らかに
日本の大陸膨張路線に沿ったものであった。したがって「対華 21 カ条要求」はその方向性と大きな差
は無いのであって、連合会もそれに賛同するのが当然と思われる。しかしそうならなかったのには、中
国の諸宗教団体・政治的有力者、そして日本の右翼・アジア主義者ら、大本教などがともに加盟した連
合会内部に、大きな矛盾・葛藤があったからではないか。

内田良平は、「対華 21 カ条要求」が発表された当初、内容には賛成だが、日本政府が袁世凱政權を交
渉相手とすることを理由に反対していた。すなわち英米の干渉を招くとの危惧を有していた [中島
2017: 368]。また頭山満は、1923年に中国側が廃棄を通告した時、「日本国民は大正四年日支条約に対
し今後支那が如何なる態度に出づるも断じて其廃棄を許さず」との決議を示した「対支有志大会」

(1923年3月28日開催)に出席し、中国側にその条約の履行を求めた。1925年の段階では、いずれ
とも、既述のように孫文を失ったという状況の変化はあったが、いやだからこそ、中国ナショナリズム
の萌芽には目を向けず、強硬な姿勢をとった [中島 2017: 374]。その一方で、連合会には相対的に日
本に対して融和的であったと考えられる連合会の中国人加盟者 (例えば江朝宗は後に汪精衛の対日協力

政権南京国民政府に、連合会の発端となった李松年、洪鈞などは「満洲国」政府に参画)らもいた。彼らの多くは、連合会結成当時、奉直戦争などで動乱状態にあった北洋政府の関係者であり、日本勢力との提携を様々な方向から模索していた。

にもかかわらず、なぜ連合会は「兩國間ノ親善ヲ阻害スル」ことを理由にあくまでも条約反対を主張し「會員ハ堅ク結束ヲ保チ目的ノ貫徹ニ努力スル事ヲモ誓約」するまでに至ったのだろうか。連合会内各勢力の主張や状況から考えて、何らかの対立があったことは確実であろう。ここでは、そのことを宗教統一思想とアジア主義の関係性に注目して考えてみたい。

宗教統一を「純粋に」宗教的理想と措定すると、すでに述べてきたように、それは各宗教の集合・統一をすることで「世界平和」を目指す、というものである。その理想を実現するための具体策が連合会であったわけだが、その目的はそれぞれで異なっていた。連合会内の各勢力を大別しながら述べると、第一に日本の右翼・アジア主義者・政治家・軍人らは、宗教統一という理想を利用して大陸膨張を狙った。第二に大本教には、第一に挙げた勢力の影響を受けながら内面化した、満蒙支配こそが世界平和への第一歩、という目的があった。第三に紅卍字会・悟善社（およびその信者でもある中国の親日的な政治家・軍人）は、そういった政略を持つ大本教と、表面上は宗教統一の理想によって繋がり、その目的遂行を後押しすることで自らの権益を保全しようと試みた。第四にその他の「純粋な」宗教者は、「救世ノ志」によって宗教の統一を目指す宗教活動を行おうとし、政略的策動とは一線を画そうとした。

これら各勢力の齟齬や差異は、連合会に大きな動揺をもたらした。すなわち、上に述べた「純粋な宗教者」は、日本の政略擁護に傾きすぎる（政治的勢力でもある）大本教・紅卍字会を中心とした連合会の状況に批判的となり、「対華 21 ヶ条要求」への反対を「堅ク結束」して決議したと考えられる。彼らから見れば、連合会には日本の政治家・軍人・右翼・アジア主義者らはもはや不要かつ有害であったと考えられ、したがって日本人参加者の多くもこの対立によって、すなわち所期の目的が達成出来なくなったことによって脱退した可能性が高い。

これらを踏まえるならば、宗教統一思想は、アジア主義（者）の諸側面（日本の政略としての側面と、欧米列強に対する抵抗のための連帯としての側面）の相克・葛藤に接続されていったとみることが出来る。ゆえに宗教統一思想は、連合会においては、上述した各勢力の思惑にそれぞれ沿うものとして、侵略の方便にも、反対にそれに抵抗するものとしても作用し、流用されていったのである。このことから、連合会崩壊の原因は、各宗派の「宗教エゴイズム」が強く、各々が「自分の宗教のよきことのみを主張」したこと〔武藤 2016：35〕というよりも、本章で見えてきたような宗教統一とアジア主義の関わり合いから生み出された、「目的」の齟齬による確執にあったと考えられる。

さて、以上に見てきた連合会の「失敗」は、その後の大本教の活動を変化させる一因となった。第一

に活動の形態およびその対象である。各宗教者を一つの組織に集合させる活動の困難さは、宗教者から大衆へとその重心を移していくきっかけとなった。特に1925年に創設される人類愛善会を中心として、大本教は国内外に大規模な大衆運動（慈善・宣伝・政治活動）を展開していくが、その趣旨からは宗教色が除かれ、参加は大本教信者以外でも可能であった。第二に政治的主張・目的が露骨化した。つまり連合会の「失敗」＝葛藤・対立をほとんど振り切った形で、1930年代になると、王仁三郎は教団名を「皇道大本」とし、対内的には天皇を中心としたファッショ化を、対外的には「皇道による世界統一」を叫んだのである。

他方で連合会の人的側面に注目すると、大本教は、誇大な「大高麗国」構想を唱え王仁三郎の入蒙にも関わった黒龍会系の大陸浪人も含めた、満蒙権益を狙う日本の右翼・アジア主義者、さらには中国への政治的介入を狙う政治家や軍人と強い関係を有し、彼らに思想的影響を与え／受けたことが分かる。また紅卍字会との関係を活かして北洋政府有力者やモンゴル王族などとも人脈を構築した。既述のように、連合会での対立はこれらのことによって生まれたわけだが、そういう意見の異なる他者同士を、実践を伴う宗教統一思想によって包括していこうとする試みこそが、日中満蒙における人的結合体を目指した大本教の特徴であったと言えるだろう。

5. 結論

連合会は、北京政府財政部顧問であった李松年が、五台山のイスラーム教徒で同じく政府の役職に就いていた洪鑄の意志を王仁三郎に伝えに来たことに端を発する。当時、王仁三郎は入蒙後であり、右翼・アジア主義者らの大陸膨張主義的な政略に影響を受け満蒙権益獲得という政治的目的を有していた一方で、彼自身の「万教同根」という宗教的理想の実現を目指し、その方法を模索してもいた。

構想の当初は「亜細亜宗教連盟」を名称とし、溥儀を総裁にする計画であった。王仁三郎は、訪日の可能性があった溥儀を大本教に招いてその総裁に就任させ、自らはその補佐役となってこの活動を行おうとしていた。それが不可能となったのちは、紅卍字会の人脈を利用して参加者を募った。この際紅卍字会は特に北洋政府関係者を大本教とつなげる役割を果たした。かようにして1925年5月20日、連合会は北京悟善社において成立したのである。その宗教活動の側面については、拙稿でも論じたとおり「宗教統合」を目指した画期的な活動であり、大本教の独自性を示していると言えよう。

政治活動の側面については、アジア主義者の影響を受けた大本教が中心となったことで、日本側の政略を多分に孕んでいた。内田良平らは、満蒙権益獲得のために支援をしてきた孫文と決裂したことで、新たな方法を模索していた。そこに現れたのが連合運動であり、世界宗教連合会であった。すなわち内

田ら日本人加盟者は連合会をその手段と考えた。

だが連合会の政治性はそれにとどまるものではなかったことが新たに明らかになった。すなわち「対華 21 カ条要求」への反対決議である。加盟した中国の宗教団体の多くは、その指導者が親日的な有力軍人・政治家であり、純粋に宗教統一という理想によって加盟したわけではない。つまりは、日本側勢力と表面上は宗教的に結びついて政治的協力を行うことで、自らの権益保全に動いた。しかし、そのような動きはその内部で対立を引き起こし、それが連合会の反対決議として表れた。すなわち、露骨に中国侵略の態度・政略を示す日本人らと相容れないばかりでなく、彼らと協力しようとする自団体の指導者にも不信感があったために、一部の「純粋な」宗教者はそのような決議を行い、それが崩壊に至る原因となったと考えられる。

ここにおいて、連合会の大きな目的であった宗教統一は、欧米列強への抵抗のための連帯なのか、あるいは日本の政略としてなのか、という葛藤を孕んでいたアジア主義に接続され、さらに多様な内容を持つことになった。だから日本の政略においても、またそれに「連帯」する中国側の政治家・軍人においても、またその両者への批判においてもそれは機能したのである。つまりその「実践」は、アジア主義（者）との関わりによって大きな限界に直面したと言える。

とはいえ、それこそが大本教の活動の特徴でもある。呉越同舟ともいうべき連合会の構成は当然対立を生んだが、それも含めて実践的な宗教統一によって包括し、人的結合体を作り上げようとしたことは、当時の日本諸宗教には見られなかったものであり、先駆的であった。後年、大本教が「満洲国」をはじめ国際的活動を展開出来たのは、連合会において思想・活動の両面で、失敗したとはいえ様々な試みを実践していたからである。連合会は 1930 年代の超国家主義的活動の前段階として、過渡的な大本教の存在を象徴していると言えるだろう。

最後に、連合会を連合運動の中に位置付けると、活動面では自団体の維持・拡大という提携当初の目的の枠を超えて、日中外交における政治目的を示し始め、それと連動して思想面では宗教統一とアジア主義が接続されるという展開を見せた。それは、連合運動が、様々な相克を抱えながら日中満蒙において活動を拡大・浸透させていく段階（初期→中期）へ入ったことを意味するのである。

付記

本論文は「はじめに」で述べたように、拙稿 [玉置 2021a] の内容の一部を土台としているが、さらに「宗教と社会」学会第 29 回学術大会における「大本教と道院・世界紅卍字会の連合運動—「世界宗教連合会」の活動実態から—」と題した個人発表をも基としており、それらに大幅な加筆・変更を加えて執筆したものである。

なお、本論文は『宗教と社会』28号（「宗教と社会」学会、2022年）に掲載されたものを、新たに転載したものである。

謝辞

本論文の執筆にあたり、紅卍字会史料を提供下さった對馬路人先生、また史料調査に応じて下さった大本教学研鑽所資料室の方々には大変お世話になった。ここに記して感謝申し上げる。

註

- (1) 「関東大震災関係 日本震災に対する北京各界の同情 其の二」[伊藤武雄ほか編 1966：538-540]。
- (2) 神戸道院ならびに「万国信教愛善会」の活動については、[玉置 2021b]を参照されたい。1925年の大本教では、世界宗教連合会と、万国信教愛善会（5月25日）がほぼ同時に結成され、そしてその直後、人類愛善会（6月9日）が結成された。
- (3) 洪鑄は、1883年に江西省に生まれた。日本に留学し大阪高等工業予備学校を卒業後、ベルギーのルーベン大学政治経済学科に入り同大学を卒業。帰国後、北京政府財政部四川成都造幣廠廠長、江西省印花稅分處處長、財政部參事を歴任。1923年2月、財政部公債司司長、後に東辺特區公署諮議などの職に就く。1934年、「満洲国」財政部理財司調査科科長に就任。その後、汪精衛南京国民政府考試院秘書長となる [徐編 1991：1051]。
- (4) 李松年は、1895年天津県に生まれた。京師大学卒。1940年より天津特別市公署專員を務めた [中西編：1941：980]。紅卍字会信者であった彼は、「満洲国」建国後は大連にも居住し、大本教の信者となって関係を深め、大本教の「真髓」を「会得」させるために、長男の李森を大本教信者に預けたりもしている [JACAR（アジア歴史資料センター、以下 JACAR のみ示す）Ref.B04012549300（第21画像目、以下数字のみ示す）各国ニ於ケル宗教及布教關係雜件／紅卍字会關係「紅卍字會員ノ大本歸依ニ関スル件」（外務省外交史料館、以下、外、と示す）]。
- (5) JACAR Ref.B12081576500（8）宗教關係雜件第3卷「7、大本教ニ関スル件」（外）。
- (6) JACAR Ref.B12081576500（25）宗教關係雜件第3卷「7、大本教ニ関スル件」。
- (7) JACAR Ref.B12081576500（8）宗教關係雜件第三卷「7、大本教ニ関スル件」。
- (8) JACAR Ref.B12081576500（18）宗教關係雜件第三卷「7、大本教ニ関スル件」。
- (9) 同前。
- (10) JACAR Ref.C03022725200 密大日記大正14年第四冊「宣統帝來遊に関する件」（防衛省防衛研究所）。

- (11) JACAR Ref.B12081576500 (19-20) 宗教関係雑件第三卷「7、大本教ニ関スル件」。
- (12) 『天津日報』 1926年11月31日。
- (13) JACAR Ref.B12081576500 (19) 宗教関係雑件第三卷「7、大本教ニ関スル件」。
- (14) 同前。
- (15) JACAR Ref.12081586100 (25) 宗教関係雑件第三卷「7、大本教ニ関スル件」(外)。
- (16) JACAR Ref.B12081597800 (4) 52、北京ニ於ケル世界宗教連合会ニ関スル件「世界宗教聯合會設立ニ関スル件」。
- (17) 同前。
- (18) JACAR Ref.B12081576500 (25) 宗教関係雑件第三卷「7、大本教ニ関スル件」。
- (19) JACAR Ref.B04012529100 (31) 本邦ニ於ケル宗教及布教関係雑件第2巻「2、大本教」(外)。
- (20) JACAR Ref.B12081585500 (10) 宗教関係雑件第五巻、「1、北京ニ於ケル世界宗教連合会関係者ノ行動ニ関スル件」(外)。
- (21) JACAR Ref.B12081586100 (2) 7、大本教ニ関スル件「大本教ニ関スル件」。
- (22) JACAR Ref.B12081586100 (7-8) 7、大本教ニ関スル件「大本教ニ関スル件」。
- (23) JACAR Ref.B12081576500 (39-40) 宗教関係雑件第三巻「大本教ニ関スル件」、[北村 1925 : 80]
- (24) 後に朝鮮の普天教やドイツの白旗団も加わる [大本 70年史編纂会編 1964 : 769]。
- (25) JACAR Ref.B12081586100 (13) 七、大本教ニ関スル件「大本教ニ関スル件」。
- (26) [玉置 2021a : 85-86]。大本教はその建設のために 300万円の寄付を募っている。
- (27) JACAR Ref.B12081576500 (25) 宗教関係雑件第三巻「大本教近況ニ関スル件」。
- (28) JACAR Ref.B12081586100 (35) 七、大本教ニ関スル件「大本教ニ関スル件」。
- (29) JACAR Ref.B12081576500 (35-36) 宗教関係雑件第三巻「7、大本教ニ関スル件」。

引用文献

- 愛新覚羅溥儀 1964 『我的前半生』 群衆出版社 (小野忍ほか訳 1977 『わが半生』 上、筑摩書房)。
- 駄場裕司 2020 『天皇と右翼・左翼—日本近現代史の隠された対立構造』 ちくま新書。
- 出口三平・清水巖三郎 2015 「宗教のつなぎ方—大本の宗教提携と平和運動をめぐる—」 『人文學報』 (108)、pp. 163-187。
- 伊藤武雄ほか編 1966 『現代史資料』 (32)、みすず書房。
- JACAR Ref.B04012529100 本邦ニ於ケル宗教及布教関係雑件第二巻 2、大本教 (外)。

- JACAR Ref.B04012549300 各国ニ於ケル宗教及布教関係雑件／紅卍字会関係（外）
- JACAR Ref.B12081576500 宗教関係雑件第三卷 7、大本教ニ関スル件（外）。
- JACAR Ref.B12081585500 宗教関係雑件第五卷 1、北京ニ於ケル世界宗教連合会関係者ノ行動ニ関スル件（外）。
- JACAR Ref.B12081586100 宗教関係雑件第三卷 7、大本教ニ関スル件（外）。
- JACAR Ref.B12081597800 52、北京ニ於ケル世界宗教連合会ニ関スル件（外）。
- JACAR Ref.C03022725200 密大日記大正一四年第四冊「宣統帝来遊に関する件」（防衛省防衛研究所）。
- Joel, Amis 2015 *The Japanese new religion Oomoto : Reconciliation of nativist and internationalist trends.* Mémoire Montréal (Québec, Canada), Université du Québec à Montréal, Maîtrise en sciences des religions.
- 川村邦光 2017『出口なお・王仁三郎』ミネルヴァ書房。
- 北村隆光 1926「世界宗教聯合会に就て」『神の国』3月号、天聲社、76-81。
- 栗原白嶺 1926「大本の名に於てされた宣統帝への謁見記」『神の国』12月号、天声社、35-48。
- 宮田義矢 2015『教義の中の近代—道院・世界紅卍字会の教義形成研究—』東京大学大学院人文社会系研究科博士論文。
- 密素敏 2007「民国悟善社研究」中国人民大学清史研究所論文、未刊行。
- 武藤亮飛 2016『現代日本における宗教間対話の実証的研究』筑波大学博士論文。
- 中島岳志 2017『アジア主義—西郷隆盛から石原莞爾へ』潮文庫。
- 中西利八編 1941『滿華職員録』滿蒙資料協會。
- Nancy, K, Stalker 2009『出口王仁三郎—帝国の時代のカリスマ』原書房。
- 奈良岡聰智 2015『対華 21ヶ条要求とは何だったのか—第一次世界大戦と日中対立の原点』名古屋大学出版会。
- 大本 70年史編纂会編 1964『大本 70年史』上、大本。
- Richard, Fox, Young 1988 “From Gokyo-dogen to Bankyo-dokon : A Study in the Self-Universalization of Omoto” *Japanese Journal of Religious Studies* 15(4), Nanzan University : 263-286.
- 邵雍 2005「日寇利用中国会道門侵華述論」『江苏行政学院学报』(4)22、124-129。
- 孫江 2004「近代中国的“亚洲主义”话语」『上海師範大学学报（哲学社会科学版）』(33)3、47-53。
- 台湾道院編 2014『道院世界紅卍字会—関東大震災への物資援助と神戸道院の創設及び日本初の開沙壇』私家版（南京道院編 1924『記念雑誌癸甲二周合刊号』南京道院、16頁）の日本語訳。
- 玉置文弥 2021a「道院・世界紅卍字会と大本教—提携初期における協力の実態と「満蒙」」『現代中国研

究』(46)、66-91。

玉置文弥 2021b 「神戸道院」・「万国信教愛善会」の活動と大本教『文研会紀要』(32)、55-72。

『天津日報』1926年11月31日。

『東京新聞』1925年3月2日。

頭山満・出口王仁三郎 1935 「頭山満氏・出口王仁三郎氏縦横談」『キング』5月号、大日本雄弁會講談社
編、127-137。

内田良平文書研究会編 1994 『内田良平関係文書』11、芙蓉書房出版。

徐友春主編 1991 『民国人物大辞典』河北人民出版社。